

～人権が尊重されるまちをつくらう～

～身近な生活の中から学ぼう～

2021.2.19

第73号



人権・同和教育だより

丹波篠山

発行

丹波篠山市
人権・同和教育研究協議会
TEL・FAX 079-593-1260
http://t-s-doukyou-hr.jp
〒669-2734 丹波篠山市宮田240
丹波篠山市役所 西紀支所3F
年3回発行 6・10・2月

高齢者与人権

全国でも高齢化が進み、高齢者が家族や地域のなかで、生き生きと暮らせるように様々な取り組みがおこなわれています。しかし他方で、高齢者が地域社会から孤立する状況や、詐欺被害なども頻繁におこっています。

丹波篠山市でも高齢化は避けて通れない人権課題としてあげられるでしょう。今号では丹波篠山市ボランティア連絡協議会 会長として、様々な地域づくりやボランティア活動を実践されてこられた向井祥隆さんに、高齢者と共々みんなで暮らしやすい社会をどのように築いていけばよいかを語っていただきました。



「生き生き人づくり街づくり」

丹波篠山市ボランティア連絡協議会 会長 向井 祥隆 さん



1. はじめに

今の私には高齢者と呼ばれることに抵抗を感じる反面、体力も気力も衰えてきたと自覚する機会が多くなっているのも現実です。小さな字は眼鏡をかけても読みづらく、テレビの音が大きすぎると孫から注意され、低い段差につまづき転倒したり、苦にならなかった米袋が重くなっていると実感するこの頃。これが老いの暮らしなのだと思感しながらも認めたくない自分があるのも事実で、活力に溢れていた若き時代を振り返ることも少なくありません。

お世話になった恩返しもできないままに、一人またひとりと先輩諸氏の姿が見られなくなっていくことも寂しさに拍車をかけてしまいます。永六輔さんから最後に贈られた言葉「生きていくということは誰かに借りをつくること、生きてゆくということはその借りを返してゆくこと」を心に刻みながらの毎日ですが、急速な伝達手段の進化や未曾有(みぞう)の災害、世界を揺るがしている「新型コロナウイルス感染症」の拡散に、無力さを感じているのは私だけでしょうか。

2. 人権意識がつかう「温かな心」

21世紀を人権の世紀にしようとする「あらゆる差別の根絶」を願いとして取り組んできた丹波篠山市の「人権・同和教育」。その成果は市民の心の温かさとして息づいていると実感することがあります。いまだ「差別の根絶」は目標として掲げ続けていかなければならない課題ですが、高齢者福祉事業や障がい者福祉事業では幅広い市民と行政、関係事業者の連携が進められています。

高齢者福祉事業は様々な福祉施策に加え、地域づくりの中核組織である「まちづくり協議会(まち協)」が地区ごとに様々な特色ある取り組みをされています。「買い物難民」ともいわれる独り暮らし高齢者の支援に、大芋地区や後川地区、西紀地区では地域が送迎車を確保して高齢の方を移送するサービスを行っています。足腰に悩みのある高齢者の体力増進を「デカボー体操」に合わせて実践する「いきいき塾」は、行政支援を受けて福祉事業所と連携した「まち協」がスタッフを確保して取り組みをされています。また、独り暮らし高齢者を対象に日置地区では月2回の「いきいきサロン」が女性会のスタッフで取り組まれており、集落では社会福祉協議会と連携しての「いきいきサロン」も実践されています。こうした地域での福祉支援活動を支えているのはボランティアな地域の人材、蓄積された人権教育の中で育まれた「心温かな人たち」なのだと思えます。高齢化を課題とする地域意識よりも、隣人を愛し、お互いの支え合いを「高い人権意識」で「ほっとけない」と協力していただいている人たちがいるからだと思えます。

3. 人権と人義

「生きるということは人に借りをつくること」の言葉を引用すれば、憲法第25条にある生存権によって人権が守られると考えると、乳幼児から高齢者まで制度や介助を受ける立場は「生かされ」ながら「生きる」ことでもあり、「借りをつくる」ことに通じます。それは「心に重荷」を感じることもあります。その「心の重荷」を払拭するには「生きてゆく」ということはその借りを返してゆくこと」の行為が必要で、憲法にある国民の義務や義理(人義)を果たしてゆくことになると考えています。お土産をもらった時にお土産でお返しをする時まで心に残る「心の重荷」と言えばわかりやすいでしょうか。お世話をされる側の心の辛さを理解すると、お返しできる機会をつくる事で対等な関係が生まれ、「心の負担」を軽減できるのです。「生きてゆく」という前向きな生き方が「活力」であり、借りを返す行為にもなり、「心の重荷」から解放されることになると考えます。

東北支援の活動の中で度々お会いしている高齢者の一人に「私も篠山に行ってボランティアがしたいものだ」と言われました。その意を理解できたのはお話の中で連日震災ボランティアを受け入れて、他人のお世話になるのも心苦しく重荷になると打ち明けられた時でした。「ボランティア活動が心の重荷になっている」これは日ごろの地域での活動においても同じことではないのか。福祉の世界では高齢者の

立場は善意の行為をうける立場の様になっているのではないかと。それゆえに「まだ福祉の世話にはなりたくない」などという言葉が高齢者の本音になっているのではないかと。親切にされると親切でお返ししたいと思うのが普通ではないでしょうか。お互い支えたり支えられたりするというのが暮らしのあり様ですが、その量や質によって「心の重荷」ができるのであれば、ボランティア活動や福祉事業には相手の「人義」を大切にすることも必要になってくるのです。「ありがとう」を聞く立場だけではなく「ありがとう」が言える立場、相手から学ぶことの受け身の姿勢、感謝の心が必要になってくるのです。

学生時代に福祉事業の先駆者で近江学園を創設された糸賀一雄先生から学んだ「この子らに世の光を」ではなく「この子らを世の光に」の言葉が思い浮かんできたのです。重度の障がいのある子ども達たちから、生きることを意味を学んだ糸賀先生は、子ども達が幸せに暮らしていける社会にすることで、全ての人達が幸せに暮らせる社会が実現すると言われました。同様に地域に生きる先輩である高齢者が幸せに生きられる社会こそが、安全安心、生きがいを持って暮らせる地域のあり方であり、生き生きとして暮らす高齢者の生き方を光として活用していくかが地域づくりのカギでもあり、高齢者の人権を守ることに必要ではないでしょうか。

4. 非常事態は天災それとも人災

身近な災害としていまだに心に焼き付いているのは「阪神・淡路大震災」ですが、「東日本大震災」も忘れることのできない大きな災害でした。阪神・淡路大震災には集落の中で軽トラ部隊を編成し、ガス臭が充満する壊れた市街地の中を救援物資の搬送で避難所を回りました。「東日本大震災」は瓦礫の撤去の後7年の間、避難所や仮設住宅、復興団地を訪問しては「歌声喫茶」の支援を続けました。他にも「熊本地震」や各地の災害地を訪問しましたが、共通して感じたのは災害で最も立ち直れないほどの傷を受けるのはどこでも高齢者でした。死亡された方も高齢者が多く「災害弱者」と呼ばれるゆえんも理解できるものでした。特に忘れられない言葉があります。原発事故で長期の避難を余儀なくされた双葉町の方が「津波は天災だけど、原発事故は人災だ。天災でなくなる命も悲しいけれど人災で死んでゆく命は悔しすぎる」と、仮設暮らしの中でふるさとにも帰ることができず死んでゆく多くの高齢の仲間がいることを、絞り出すように無念の言葉にされたのは、震災から5年の歳月が経っていました。

多くの仮設住宅があったいわき市では震災後に亡くなった「関連死」が被災直後の死者数を超えていました。そしていまだに帰郷できない地域も残されているのです。人災の犠牲者を残したまま震災を私たちの記憶の中から消えさせていいものでしょうか。そしてその多くが復興から取り残された高齢者であることの実態を。若い人たちは再起をかけて仮設住宅を去り、帰郷をあきらめ新しい町での暮らしを選びました。残されたのは帰郷の未練が断ち切れない高齢者たち。あれから10年、「歌声喫茶」で笑い涙した人たちの顔が浮かびます。

5. お節介な取り組みのすすめ

コロナ禍の中で「ソーシャルディスタンス」という言葉が合言葉のように使われています。物理的な距離を守ることによって感染を防ぐ行為となりますが、マスクの着用とともに必須条件ともいえる予防策として認知されています。その対応は心の在り方としても、適度な距離感を持ちながらのお付き合いともいえるのではないのでしょうか。人間関係は遠からず近からずの節度ある介入が大切だともいわれます。それをお節介とするならば、「心のソーシャルディスタンス」はお節介の実践でもあるのです。これは子育てにも、友人との交流にも、職場や学校・地域での人間関係のすべてに共通する生き方のノウハウです。

コロナ禍は「天災」かもしれませんが、適切な施策や無責任な生活態度が拡大に拍車をかけているとすればそれはもはや「人災」です。天災は防ぎきれないものだけに人災は防げるものです。

人権は互いに守り合うもの、「心の重荷」をつくらず平等に生きること。コロナ禍の中でも風評被害や差別的な言動を許さない生き方、「心の重荷」を意識した「心のソーシャルディスタンス」な活動を実践しましょう。非常事態宣言があるからではなく、お互い助けられたり助けたり、支えられたり支えたり地域の暮らしにお節介(節度ある介入)を期待したいと思います。高齢化が進む丹波篠山市でその高齢者の一人として、笑顔の絶えない地域づくりに奔走したいと願っています。

丹波篠山市人権・同和教育研究協議会
ホームページ リニューアルのお知らせ

ホームページをリニューアルいたしました。各研修会やイベントなど最新の情報を皆さまにお知らせいたします。天災や新型コロナウイルス感染拡大状況などの影響による開催の有無も緊急のお知らせとして、このホームページでお知らせいたします。また、そのほか啓発活動として様々な人権に関する情報を掲載したいと考えております。是非ご覧ください。

■新ホームページアドレス <http://t-s-doukyou-hr.jp> 【もしくは「丹波篠山市同教」で検索】

フィールドワークに替えて

在日コリアンの足跡を訪ねる

今から107年目前、大芋村福井の常蓮寺山から硅石を掘りだしていました。木馬で山のふもとまで降ろし、遠く九州の八幡製鉄所(北九州市)まで運ばれていました。

大芋村・村雲村ではたくさんの硅石鉱山が発見されました。1933(昭和8)年ころの篠山新聞には「又出た大硅石層!」「又出た豊林寺山の硅石!」などの見出しが躍っています。当時の価値で数百万円とも報じられています。戦中戦後を通して硅石が掘り出されていきました。黒崎窯業や品川白煉瓦などの企業が採掘権を買い取り、地元の深田硅石や住野硅石などが採掘をしていました。住野丙馬氏が火気責任者と思われる、1937(昭和12)年に建てられた火薬庫も、下笹見に残っています。それぞれの坑道は一人の親方に任せられ、数人の鉱夫が採掘に当たっていたようです。戦時中の抗夫には朝鮮の人たちもいました。戦後になると、在日コリアンが、親方として一つの坑道を、任されることも多かったようです。そのもとで、農閑期に地元の人たちも働いていました。

過日、戦後まもなく、豊林寺の鉱山で採掘をしていた山本(黄和順)さんに、詳しくお話を聞くことができました。山の中腹に坑口があり、そこからケーブルで下まで降ろし、トラックで運び出していたこと。今立っている所の真下に、大きな坑道があり、よく水が溜まって毎朝汲み出していたことなど。そんな時、豊林寺のご住職から、鉱山事故の殉職者慰霊碑のあることを聞かされました。それはまさに、篠山新聞の記事にあった、住野丙馬氏の所有する鳥山鉱山での3名の死亡記事のものだったのです。



豊林寺に安置されている慰霊碑

1948(昭和23)年3月5日の篠山新聞は、3名の在日コリアンの死亡を伝えています。このように、鉱山事故の犠牲者の慰霊碑が見つかることはほとんどありません。しかも、在日コリアンの人たちの慰霊碑は例を見ないことです。戦後の、この丹波篠山の地で慰霊碑が建立されたことは、特筆すべきことです。いつ、だれが建立したのかは不明ですが、永らく忘れ去られていた慰霊碑が、その後、お寺の一角に安置され、毎月18日観音講には檀家の人たちによって供養されています。鳥山鉱山の廃坑跡も、住野丙馬氏所有の火薬庫のすぐ上の山の中腹に見つかりました。

1913年から始まった、この地の硅石産業は、戦中戦後と繁栄を極め、篠山の基幹産業として成長してきました。しかし、良質の鉱石の減少や代替品の開発により、硅石の需要は減少していきました。1970年を境に硅石鉱山の休山が始まります。それに伴い、多くの在日コリアンも篠山に残る人、去っていく人に分かれていきました。丹波篠山では、上笹見奥新田の小林天岩鉱山が、1987(昭和62)年を最後に閉山しました。鉱山の跡は今も何ヶ所かで確認できますが、こうして丹波篠山からヤマが消えていったのです。

小林天岩鉱山の鉱口跡

銘板設置の会 松原 薫さん

1869(明治2)年の全藩一揆について

この一揆は1869(明治2)年、強訴をきっかけとして起りました。すでに明治維新後のことで、三田藩に起こった一揆が成功したとの噂をききつけた立杭村・小野原村の人々が年貢の「上納五分引」などを願って藩主に訴状を渡そうとして篠山の城下に押し寄せました。これに多くの人が加わり、ついに全藩一揆へと発展しました。藩は武力で鎮圧しようとしたため、農民との間で激戦が交わされました。そして、農民ら176名が捕縛され、首謀者は斬罪などの重い刑を言い渡されました。翌年、斬罪の者たちは曾地河原で処刑されました。いまも河原のそばには、一揆で処刑された人々を弔う小さな地蔵さんが祀られています。人々が処刑された翌年、廃藩置県が実行され篠山藩は消滅しました。



しかし、この全藩一揆には画期的な出来事として被差別村の人たち10ヶ村24人が参加していて、この一揆で先頭に立ち果敢な行動をとっています。解放令が発布される2年前の出来事で、明治の新しい世の中になったのですから、当然、自分たちの身分も解放されると願い込めての参加だったのでしょう。

そして、この一揆は、のちの篠山における自由民権運動に影響あたえることとなります。

丹波篠山市古文書研究会 今井 進さん

丹波篠山市同教企業部会 会員募集中!

社員一人一人の人権が尊重され、元気に仕事ができる職場づくりのためにも是非ご加入ください。毎年、管理職対象、従業員対象の研修会を開催しております。

お問合せ先 丹波篠山市人権・同和教育研究協議会事務局
TEL・FAX 079-593-1260

暮らしの中から

「言葉は心」

2021年という新しい年を迎えてもなお新型コロナウイルスの感染拡大は収まらず、1月初旬には対象地域を限定した非常事態宣言が発令されました。そんな中、以前から問題になっている医療従事者や患者、その家族の方々に対してひどい言葉を浴びせたり、SNSを使って非難したりする人が依然として後を絶ちません。一方で、新型コロナウイルスと闘う人へ感謝の言葉や応援メッセージを届ける活動も広がり、多くの人を励まし勇気づけています。



昔、日本では、言葉には「言霊(ことだま)」という不思議な力が宿っており、言葉は使い方によって人の幸せと不幸を左右すると信じられていたそうです。この考え方は今でも通用しているように思えます。つまり、言葉は使い次第で人に勇気を与える魔法にもなり、逆に人の心を傷つける凶器にもなり得るということです。

先日、同じ市内に住む私の弟が訪ねて来ていろいろな話をしている中で、ふと次のようなことを言ったのです。「小学校の何年生か忘れたけど、家で宿題をしていて兄貴(私)に問題のやり方を聞いたら、『こんな問題も分からへんのか』と言われたことがある」と。

50年前、私は自分が言ったことなど全く覚えていないのに、言われた弟の方は今でもはっきりと覚えていたのです。私はこれを聞いてドキッとしました。私が言った一言がそんなにも心を傷つけ残っていたのかと思うと、弟に対して申し訳ない気持ちでいっぱいになると同時に、言葉の持つ怖さを感じずにはいられませんでした。一度口から出た言葉は引っ込めることができません。だからこそ、もっと相手の気持ちを考えて言葉かけるべきだったと深く反省させられました。

言われると気持ちが温かくなりうれしくなる言葉。言われると気持ちが落ち込み傷ついてしまう言葉。私たちは職場や家庭、地域でどんな言葉を使っているでしょうか。

「ひとつのことば」

北原白秋

ひとつのことばで	けんかして	ひとつのことばで	なかなか
ひとつのことばで	頭が下がり	ひとつのことばで	心が痛む
ひとつのことばで	楽しく笑い	ひとつのことばで	泣かされる
ひとつのことばは	それぞれに	ひとつのこころを	持っている
きれいなことばは	きれいな心	やさしいことばは	やさしい心
ひとつのことばを	大切に	ひとつのことばを	美しく

この「ひとつのことば」の詩にあるように、言葉には心があり、その言葉を使う人の心が表れます。一つ一つの言葉を大切に、人に勇気や希望を与え心が温かくなるような言葉がけをしていきたいですね。(細見秀司)

「昔からそうしているから?」

今年は新型コロナウイルス感染症予防から、お家で年末年始を過ごされた方が多いのではないのでしょうか。私も年末は紅白歌合戦を見ながら年越しそばを食べ、お正月はおせち料理を食べて過ごしました。



お正月のおせち料理について子どものころはよく、おばあちゃんにおせち料理に入っている食材にはそれぞれに意味があるのだと言われてきました。例えば、黒豆には「マメに働く」、数の子は「子孫繁栄」、レンコンは「先々の見通しがきく」など食材一つ一つに意味や思いが込められており、お正月は、新しい年を縁起の良いものを食べて迎えるものだとして教えられました。

お正月にカレンダーを掛け替えていて、ふと「大安」や「仏滅」という言葉に気づきました。これはその日の吉凶を示すとされる「六曜(ろくよう/りくよう)」と呼ばれるもので、先勝、友引、先負、仏滅、大安、赤口があります。しかし、この六曜自体に科学的根拠や良し悪しがあるわけではありませんが、日によって避けるべき事柄や時間帯などがあるとされています。

私も知人の結婚式に出席した際、「こんな日に結婚式をしなくても、大安の日にしたらよかったのにな…」と知人に言ってしまったことがあります。そのときは何も考えないで言ってしまったのですが、昔からの風習や迷信を気にしすぎて相手に不快な思いをさせたり、傷つけたりしてしまったのではないかと思います。

日本には、相撲の土俵には男性しか上がれない、お祭りの御神輿には男性しか乗れないなど伝統的な風習が多くありますが、ただ「昔からそうしているから」という理由で続けるのではなく、そこに込められている意味について一度考え、未来へ引き継いでいくことが大切ではないでしょうか。(中井慎太郎)

編集後記

今年度も最後の会報発行となりました。昨年度の最後の編集後記を読み返していると、今年度にはオンラインピック・パラリンピックが開催される事に触れていました。当時はそれらが延期され、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、世界中が危機的な状況になるとは思ってもいませんでした。生活様式も大きく変わりました。一方でコロナ禍により失業や雇用日数の削減などから貧困者が急増し、多くの生活困難者を生み出しました。また、前号でテーマにしたように、コロナ差別も全国で起こっています。一人でする事はとても小さなことかもしれませんが、生活に困っている人、生きることに行き詰まっている人、誹謗中傷を受け傷ついている人、そうした様々な人たちに寄り添い話を聞くことだけでも、もしかすると生きる希望をもたらし、それができるかもしれません。